

シクラメンの葉腐細菌病による 芽枯れの発生要因について

1 試験のねらい

シクラメンに発生して大きな被害をもたらす葉芽、及び花芽の枯死現象、すなわち、芽枯れは、主として葉腐細菌病によって引き起される病徴であることを明らかにし、これらはシクラメンの生理・生態を無視した不適切な栽培条件によって多発することを確認してきた。本試験では、高温期の施肥法、用土の物理性、鉢の種類及び鉢底の停滞水と発病の関係を検討したので報告する。

2 試験方法

平均成葉数10枚、生体重23 g のフリンジ咲フェールバーク（7.5 cmポリポット植苗）を1981年7月3日に4号鉢へ鉢がえ、8月26日に5号鉢へ定植して栽培し、加温前の11月5日に分解調査した。処理は施肥法4水準（全期標準、全期3倍、鉢がえ時標準一定植時3倍、鉢がえ時標準一定植時3倍）、用土の物理性4水準（高集合性粗土及び細土、低集合性粗土及び細土）、鉢の種類2水準（プラスチック、素焼）及び停滞水の排水法2水準（自然排水、毛管排水）とした。供試個体は1区5鉢の2反後とし、生育期間中の発、発病による枯死、除去病葉数、芽枯れの発生について調査した。最終調査では塊茎内部の病徴も確認した。

3 試験結果及び考察

- (1) 施肥法と発病の関係 8月11日から26日までの15日間における発病は、鉢替時の基肥を3倍量施用した区で多く、標準施用した区が少なかった。8月26日の定植以後の発病は施肥法による顕著な区間差はなかった。このことから、高温期の肥料の過剰施用は発病を助長する要因の一つと思われる。
- (2) 鉢の種類及び排水法と発病との関係 慣行の排水法（自然排水）では、8月11日以降の発病は素焼鉢よりプラスチック鉢で多発した。
- (3) 用土の物理性と発病の関係 高集合性ロームを粉碎して3 mm目のふるいを通し、ふるい上に残った粗土を用いた用土の8月11日以降における発病は極めて多かった。これは、用土の保水性が低く、乾燥しやすいため、植物体の萎凋頻度が他区よりも高かったことや、用土のpF値の低下に伴う毛細根の枯死などが原因していると考えられた。

4 成果の要約

芽枯れの主たる原因である葉腐細菌病の発生は、施肥量や施肥の方法、鉢の種類、用土の物理性などの栽培条件と関連が強く、特に、高温期の施肥過多、プラスチック鉢による栽培、用土の乾燥による植物体の萎凋は本病を多発させるので、栽培的防除を図るためには、これらのことについての十分な配慮が必要である。

（花き部 峯岸長利，病理昆虫部 木嶋利夫）

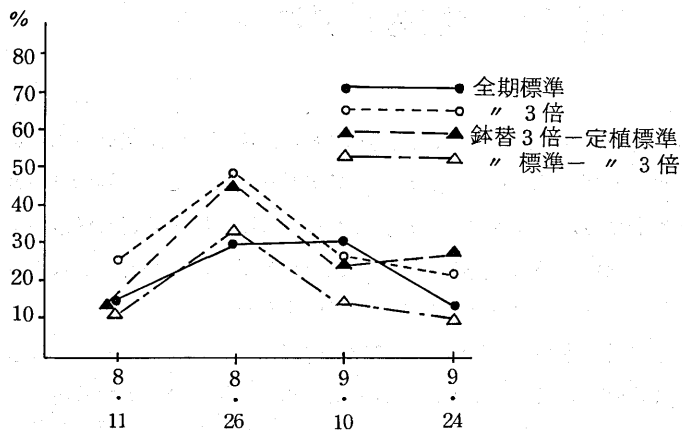


図1 施肥法と発病の関係

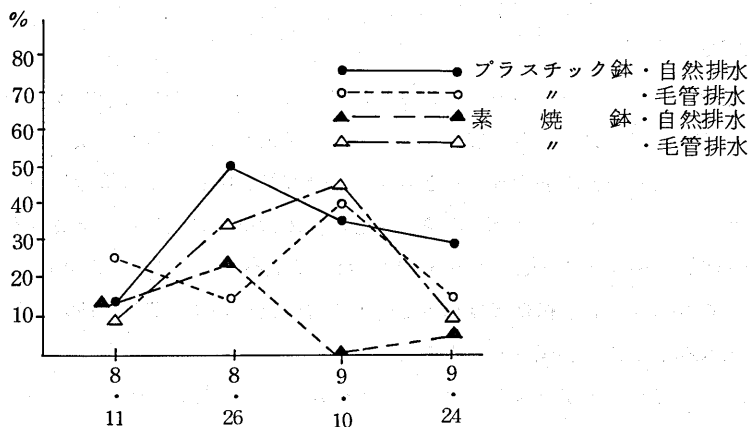


図2 鉢の種類及び排水法（注2）と発病

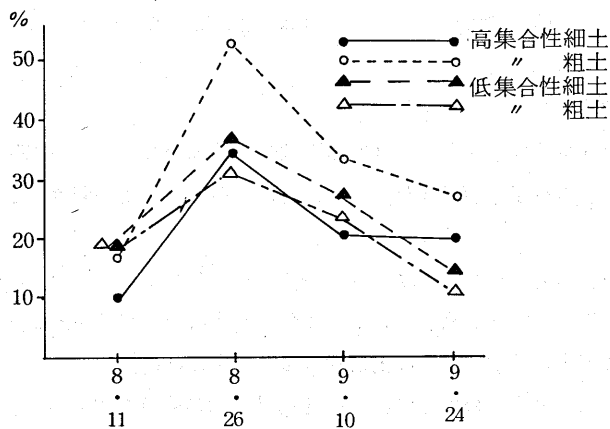


図3 用土の物理性（注3）と発病

（注1） 鉢替日 7月3日，定植日 8月26日

（注2） 毛管排水は鉢底から不織布を垂らし，毛細管現象を利用して排水した。

（注3） 団粒分析により，集合度の高い，破碎性の小さいローム土を高集合性ロームとし，これの3mmのふるい下を細土，残りを粗土とした。